自分の声

W校　高等部二年一組
中山　モイラ

私はいつも他の人の声を聞いています。それをずっと続けていたら、自分の声が掻き消されてしまうことに気が付きました。小さい頃から必ず他の人に合わせていた私は、大きくなってもその癖から離れるのが難しくなってしまいました。友達がバレーボールを始めると聞いて私も始め、周りの人の嗜好に合わせ、自分が本当に好きなことさえも偽っていました。嫌なことを言われても、正しいと思って信じていました。時が経つにつれ、自分が誰かわからなくなりました。自分の好みは他の人の真似をして、性格も人によって鏡のように合わせていました。このような生活を続けるのは自分にとって辛かったです。いつも他の人が思っていることを意識しすぎていた私は、できるだけ目立たないようにしようと努め、着るものも、話すことも、全部周り

に合わせていました。どうやったら自分らしくできるのか。他の人にそれを尋ねたかったです。もし自分らしく生きていたら、他の人と合わせるのより楽しく生きられると知っていたからです。

自分は何をして嬉しいか。自分はどんな性格を持ちたいか。自分は誰か。私は変わりたかったことに気付き、自分の声を聞き始めました。

私は中一からバレーボールをやっていました。始めようと思ったきっかけは友達でした。「友達がしているから」と高校二年生まで続けました。バレーボールをしていた五年間は過酷でした。気の強い女子の集団の中で、自分は透明な壁のように感じていました。全く気が合わなくて、普段仲間外れだった私は誰にも相手にされず、とても悲しい思いをたくさんしてきました。試合中もチームメイトに怒鳴られて何度も泣いたことがありました。できるだけ頑張っても思うようなプレーがで

きず、罰として、連帯責任だとして、他のチームメイトも一緒に走らなければならないことがありました。みんなは私のことを睨み、私の耳に届くように悪口を言っていました。当時、他の人が言ったことを全て信じていたので、私は自分自身を責めていました。「試合に勝てなかったのは私のせいだ」「みんなは私のことが好きじゃない」「私はどこを変えたらチームメイトやコーチに認められるのか」など様々な考えがいつも頭の中に浮かんでいました。

今年、私はバレーボールを辞めることにしました。あれだけ時間を注いで、あんなに辛い思いをしても続けてきたのに辞めるのはもったいない気がしましたが、結果的には辞めてすごくよかったです。もし、私が楽しくバレーボールをプレーすることができたのなら、今でも辞めずに続けていることでしょう。負けず嫌いで、勝つことしか考えていないチームメイトやコーチにうんざりしていた私

は、自分の内なる声を殺し、周りに合わせようと必死になっていました。散々悩んだ上、辞める決意をしたのは自分が本当に好きなことを認識できたからです。

私は絵を描くことがとても好きです。自分が辛い思いをすることより、自分がしていて嬉しいことに自分の時間を使おうと思いました。今更、「なんでもっと早く辞めなかったのか」と思う時があります。絵を描いていると時間を忘れます。私は何かを作って人に喜んでもらえるのが何よりも嬉しいので、絵を描く時間は自分が本当に幸せだと思える時間です。私が絵を描き、表現したいことは無限大にあります。最も自分の声を強調できる方法であるとも思います。自分の声を聞き始めてからは、自信も付き、一日一日がもっと楽しくなりました。昔の自分に教えてあげたいです。

今年の夏休みの過ごし方

W校　中等部三年一組
新木　太一修

僕はこの夏に二つの貴重な体験をした。

一つ目は、夏休みが始まり初バイトへと取り組んだことだ。それはお客さんのゴルフバックを担ぐキャディーの仕事だった。きっかけは学校のゴルフのコーチからの紹介だった。

初日、中年のおじさん、おじいさん、若い大学生など沢山の人が待合室にいた。全キャディーは自分が指名されるのを待つ。最初に話してかけてきてくれた若い大学生は、キャディーは指名されるまでの待ち時間が一番大変だと教えてくれた。五分しか待たなくていいときもあれば、三十分、一時間、二時間待つこともあると言われ、少し気が重くなった。運の良いことに初日ということで、ゴルフ場に着いてすぐに指名され十分しか待たなくて済ん

だ。

僕は、初めてのお客さんなので気合を入れるぞと思った。雇われる前きちんとトレーニングをしたので、基本のことは分かっていたし簡単だろうと、今考えれば大きな勘違いをしていた。なぜなら、キャディーは思っていた五倍ほど難しかった。スピードがとっても大切なのだ。プレイヤーがボールを打つ前、風の向き、グリーンまでの距離、それを計算しどれくらいの距離を狙うかを短時間でやる。打ったあとも、急いでクラブを受け取りバックの中へとしまい。次ボールの行き先へと急ぐ。初めてのお客さんは白髪の落ち着いている人ではあったが、何かと僕の仕事の改善点があればすぐに言ってくれる、とても優しい人で助かった。「急いでくれるのは助かるのだが、焦らなくてもいい。焦ることで誤ちを犯す。」と言われた言葉が心に残った。

ついに、四時間のラウンドが終わり初任給をいただいた。使い道はないが、中学三年生

にしてはすごい額であった。汗を流しお金を貰うという事が快感となり、それから何度も足を運んだ。この仕事の最高な所は、好きな時に来ていつでもできるということ。そのおかげでゴルフの大会に出ることもできたし、一週間の祖父母と従妹を含むハワイ旅行のおこずかいを貯めることもできた。大会の多い自分にとってこの仕事は本当にぴったりだったと思う。このバイトを紹介してくれたコーチには感謝しかない。

二つ目は、祖父母と従妹を含む家族全員でハワイ旅行の思い出が作れたことだ。一時帰国を避け、祖父母の家は日本から、僕たちはニューヨークからハワイで落ち合うことを計画したのだった。一週間の旅はあっという間で、大自然の中でゴルフをしたり、海水浴、ダイアモンドヘッドの天辺までの距離をアウトレットモールで歩いたり、美味しいご飯を食べたりするなど、最高の時間を過ごすことができた。やっぱり別れる時はいくつになっ

ても辛い。飛行機に乗った瞬間の絶望感が、この１年の悲しかった事うんぬんグダグダトップで１位だ。これから学校が始まるが、気がとても重たい。でも、来年もまたこんな風に夏を楽しく有意義に過ごせるのであれば、少しは九月から始まる学校への意欲を引き出す動機付けになるかもしれない。

パンデミックの中での生活

W校　初等部六年二組

菅原　由香里

COVID-19、通称新型コロナウイルス。中国から始まり、世界中に感染が広がった感染病。ワクチンが作られ、今はある程度沈静化していますが、一時期はマスク着用が義務だったこともあるほどパンデミックが起こっていました。そんなコロナウイルスは、人々の日常生活に多大な影響を及ぼしたと言えるでしょう。私もコロナウイルスに軽症とはいえ掛かりましたし、授業がリモートだったり、とても混乱しました。この作文では、そんな苦労と混沌のあの頃を振り返っていきたいと思います。

さて、COVID-19という名称からも分かる通り、コロナは二〇一九年に初確認され、二〇二〇年から流行りだしたウイルスだったと記憶しております。当時私は現地校では四年生、補習校では三年生で、あまりオンライン授業

の仕組みが分かっておりませんでした。そもそも私は英語よりかは日本語の方が得意でしたので、現地校の成績もあまり良くはなかったのですが。現地校では冬休みが終わり、二学期が始まったところでしたので、皆休み気分が抜けていなかったんですけれども、その後すぐにパンデミックが始まって、いやでも気を引き締めなくてはなりませんでした。ですが、私たち生徒はあまりその時は危機感を持っていなかったように感じます。どちらかというと、教員の方々がピリピリしていたのでしょう。私は当時、風邪が流行っているんだな、位にしか思っていませんでしたが、しばらくすると、学校が完全にリモートになりました。画面越しでミーティングが始まり、先生は液晶に写る生徒の出席を取って、授業が始まります。オンラインのクラスルームに上げられていた教材を予め印刷しておいて、授業に使ったりしながら、画面シェア機能を使ったりして算数や国語を教えてもらいまし

た。ですが、その間にネットワークが落ちたり画面シェアが上手くいかなかったりで大惨事です。その当時の私はきっと「先生たち、機械に嫌われてるんだろうな」と思っていたことでしょう。そしていやらしいのが、先生によって使うアプリが違うことです。そっちのアプリで入ろうとしたけれど別のアプリだった、今日はあのアプリに変更するらしい、など。先生が入れなくて苦戦することも。毎日何かしらの問題が起こっていた記憶があります。しかも宿題がどこに出ているのかとか、何を書けばいいのかとか、情報があちらこちらに散らばっていて、正直言ってとても分かりにくかったです。さらには補習校もデジタルに。こちらは先生が一人な分情報の整理がしやすかったですが、やはりここでもネットワーク落ちだとか、そのアプリが使えないだとか、またまた不便なことが起こる訳です。一番ひどかったのは、音声が切れること。クラスに何人かはとても回線が重い人が居て、

かくかく動いたり音が途中でぷつ、と切れることも。他には雑音が酷かったりだとか、遅延が頻繁に起こる人も。それに私たちは当時小学三年生。デジタルにテンションが爆上がりして、背景で遊び倒したりだとか、意味が分からないまま退出ボタンを押したりだとか、結構やらかしていました。悪ふざけが過ぎますし、先生は頭を抱えていたでしょう。そんな日々も、三学期位から終わりを迎えます。春位から、クラスがハイブリッドになったのです。ここでいうハイブリッドとは、もちろん車の方ではありません。クラスで半々に分かれて、交互に学校に来ることを、先生たちはハイブリッドと呼んでいました。久しぶりに来た学校には、ソーシャルディスタンス、と書かれた張り紙が至る所に貼ってあり、黄色いテープが大体二メートル間隔に床についていました。昼休みも授業中も、どこにいってもソーシャルディスタンスが付いて回って、やはりまだコロナは続いているんだな、

と思った記憶があります。そして四年生最後の学期はハイブリッドのまま終わり、私は現地校五年生に突入しました。五年生はハイブリッドから始まりますが、そろそろいいだろうと学校が判断したのでしょう、二学期から三学期位にかけてマスク着用のまま全員出席に代わっていきました。そうなったときの感動と言ったら、もう言葉で言い表せません。デジタルオンリーで授業をやるのは金輪際やめて欲しいですね。後はもうスムーズに進んでいって、現地校の六年生に入りました。補習校はまだリモートだったと覚えがあるのですが、私の記憶はあてにならないことで有名なので、違うかもしれません。もう、後はマスクについても規則が緩められたり、補習校も対面になったりして、脅威は過ぎ去っていきました。

そんな怒涛の二年間でしたが、今は落ち着いて勉学に励むことが出来ております。こういう当たり前の生活のさらに上を私たちは望

んでしまいますが、コロナはそんな生活もいつか壊れるかもしれないということを再確認できた出来事でした。ですが、それはそれ、これはこれ。出来れば二度と流行って欲しくないですね！

ぼくのねこ

W校初等部3年1組
わたなべはる

ちょうど一年前、ぼくの家のねこ、ろくちゃんが急に死にました。十一までした。この時、ぼくとぼくの家族はいっぱい泣きました。ろくちゃんは、ぼくのお母さんにいつも「ジントル・ツァイアント」とよばれていました。ぼくは、ろくちゃんにかわるねこはいないと思いました。

ぼくは、生まれた時からずっとろくちゃんがいたので、ろくちゃんが死んだ後もろくちゃんのことをいつもいた場所で見るような気がしました。声が聞こえたこともありました。

今年の春、ぼくのお母さんがまたねこをかいたいと言いました。その時ぼくは、「ろくちゃんにかわるねこはいないから、ほしくない。」と言いました。ぼくは新しいねこが来たら、みんながろくちゃんのことをわすれて、もう新しいねこのことを好きになっちゃうと思いました。お母さんは、「またそうだんしよう。」と言いました。

夏休みの終わり、ぼくはお父さんとお母さんといっしょにねこのドキュメンタリーを見ました。ぼくは、ねこが今までよりももっと好きになって、とってもかいたくなりました。ぼくたち三人はすぐに近くの動物ショ

ルターに行って、ねこを見ることにしました。

ツェルターに行く前、ぼくたちはねこを見るだけのつもりで行きました。ツェルターには、ねこがたくさんいました。ぼくはこうふんしました。ろくちゃんが死んでからぼくはしばらくねこと遊んでいなかったがらです。ぼくたちはたくさんのねこと遊んだ後、二匹の兄弟をもらうことにしました。くろねこのドウードと白と茶のダスティーです。でも家に帰った後に、名前がくろちゃんとしろちゃんになりました。

ろくちゃんはぼくにあまりなついていなかったけど、くろちゃんとし

ろちゃんは、ぼくにけっこうなついて、たくさんいっしょに遊びます。

ぼくは二匹がぼくのことを好きだということがとてもうれしくて、ありがとうと思います。

ぼくが新しいねこをもらって、気イオいたことがあります。みんなが、ろくちゃんのことをもっと思い出して、もっとろくちゃんのことを好きになっていることです。ぼくがが配していたことと、ぜんぜんちがうことがおきたのです。

でも、ぼくは、ろくちゃんもろちゃんもしろちゃんもみんな大好きです。